

人も魚も春バテ気味？ ～魚病と季節性～

寒い冬も終わり、ようやく春本番といった季節がやってきました。春は暖かい季節というイメージがありますが、一方でポカポカ陽気と冬の寒さが混在する四季の中で最も寒暖差が大きい季節。この気温差のストレスで「夏バテ」ならぬ「春バテ」気味な内水面試験場魚病担当の古川です。

さて、人も体調を崩しがちな季節の変わり目4月、実は魚も病気がちな季節です。「そもそも魚って病気にかかるの？」という方もいらっしゃるかとは思いますが、魚も寄生虫や細菌、ウイルス等によって病気にかかります。魚の病気は『魚病』と呼ばれていて、冬が明けると水温が上がり魚病の原因となる細菌などの病原体が繁殖しやすくなるほか、冬の間不活発でエサを食べなかった魚や、春に産卵期を迎える魚は抵抗力が低下しているため、春から初夏にかけては魚病発生の報告が多い傾向があります。

魚病の中でも有名なものを例に挙げると、アユの冷水病やコイのコイヘルペスウイルス病があります（写真1）。もし発生してしまうと、養殖場のアユが全滅してアユ養殖業に損害が出たり、河川でコイが大量死する恐れがあります。



写真1：冷水病のアユ

下顎の出血や体表に穴あきなどの症状が出ます。

そこで内水面試験場では、アユ等の県内の養殖魚を定期的に検査し、魚病の発生を確認した場合には対応を指導するほか、河川で魚の大量死があった場合には原因究明の一環として魚病の可能性を調べたりしています（写真2）。

人も魚も病気にならないのが一番ですが、もしもの場合に備えて、今後も日々の検査に努めてまいります。

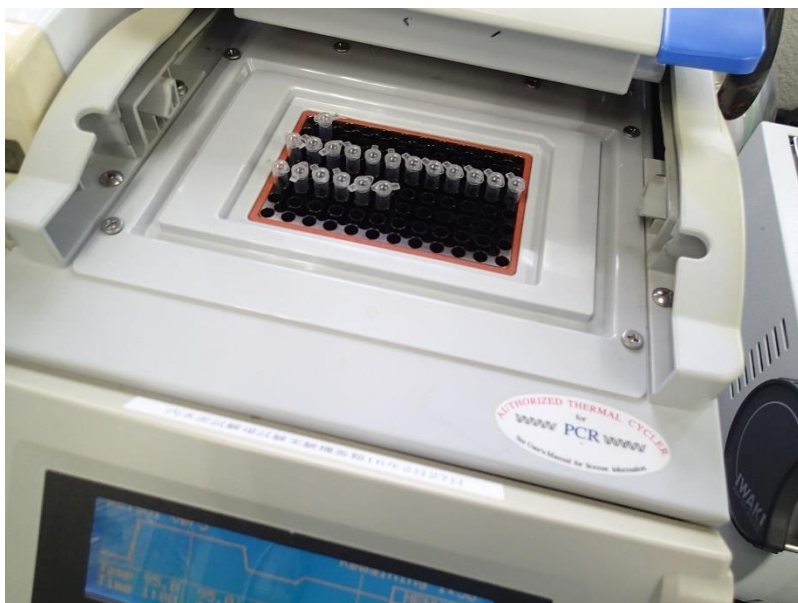


写真2：PCR検査機器（サーマルサイクラー）

病原体の有無を判定するため、この機器で病原体のDNA断片を増幅します。